

館蔵品を用いた大学入試問題の研究

秋 山 亮

はじめに

令和3年1月、従来の大学入試センター試験に代わり、大学入試共通テスト（以下「共通テスト」という）が実施された。この試験は、平成21年度告示高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という）において育成することを目指す資質・能力（知識の理解の質や思考力・判断力・表現力など）を踏まえた問題を重視して出題することとなっている。共通テストは受験生のみならず社会一般からの関心も高く、高等学校における授業のあり方へのメッセージ性も高い。こうした入試問題の質の転換は、従来の日本史における「暗記科目」「知識偏重」というイメージからの脱却を図るものであり、歴史教育の方法や考え方にも大きな影響を与える可能性がある。

さて、共通テストに先行して、平成29年・平成30年には試行調査が実施されており、そこでは多岐にわたる資料を読み解き、仮説を立てて考察する問題が多いのが特徴であった。平成29年度の試行調査問題では、13点の図版（絵図や写真等）・7点の史料が用いられ、平成30年度の試行調査問題では、13点の図版（絵図や写真等）・14点の史料が用いられた。また、大問の設定も、生徒が学習内容をまとめ、その成果をレポートで発表するというシチュエーションなどが多く、主体的な学びを意識した構成になっている。その中で特筆すべきは、学ぶ過程で博物館や歴史資料館、図書館を活用するという場面がしばしば見られることである。これは、令和3年1月16日実施の「日本史B」第1問、令和3年1月30日実施の「日本史A」第1問・第3問など、実際の共通テストでも同様の場面が設定されており、単なる構成上の設定というよりは、学びの場として博物館等の活用を喚起するものと捉えることができる。無論、指導要領に沿った形で作問する必要があったためでもあろうが、学習過程で博物館の利用が明確に表現されている点は、当館としても意識していきたいところである。とはいえ、受験を控えた高校生にとって、博物館を積極的に利用する動機付けはなかなか難しい。当館の館内授業や出前授業を希望する高等学校は近年増加傾向とはいえ、岡山市内の学校を中心に年間10校程度である。また、関心がある展覧会のために入館することはあっても、研究・調査やレポート作成等のために高校生が個人（あるいはグループ）で学芸員にアポイントをとるケースは稀である。何かしら博物館を利用したくなる現実的な「仕掛け」が必要なのではあるまいか。当館の展示や事業をもとに、受験生にとって関心の高いテーマの問題を作成し、館内で展示資料や解説パネルを見ながら考察する。そのような構成上の工夫はできないだろうか。そこで、本稿では館蔵品を用いた共通テストの試案（日本史の問題案）を作成し、受験を控えた高校生が博物館を利用する上で、どのようなことを求めているかを模索してみたい。

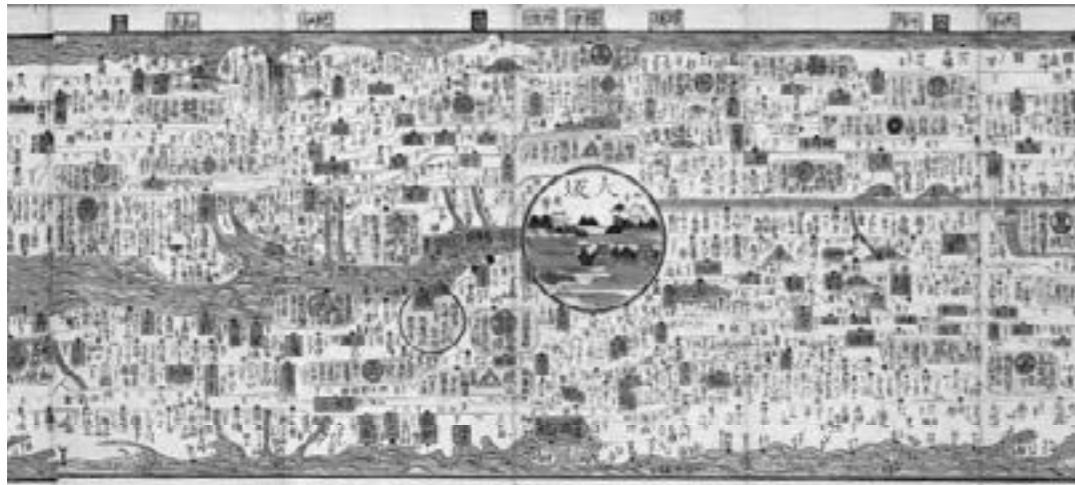
1 館蔵資料を活用した問題例

次の文章A～Eは、岡山県立博物館を利用した高校生の活動に関するものである。この文章を読み、下の問い(問1～6)に答えよ。(資料は、一部省略したところもある。)

A

博物館2階にある展示室では、「いろいろな地図」という春の特別展が開かれていた。そこでは、岡山の古地図や旅に関わる地図など、様々な資料が展示されていたが、高校生の祐樹さんが注目したのは、次の図の資料である。

図 『改正増補大日本国順路明細記大成』(部分)



寸法 9×18cm (折りたたみ時) 折帖 木版彩色刷り
嘉永3 (1850) 年に書林甘泉堂和泉屋市兵衛より初版出版

問1 図の資料の説明a・bと、この資料と関係があると思われる社会背景c・dの組み合わせとして最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

- a この資料は、現在の大阪を中心とした関西圏を表示しており、その縮尺はほぼ正確に示されている。
- b この資料は、手軽に持ち運べるように工夫されており、旅に必要な情報がカラー・イラスト付きで盛り込まれている。
- c この資料が広く普及した背景には、湯治や物見遊山など庶民の旅が広く行われていたことが挙げられる。
- d この資料が広く普及した背景には、ペリー来航を機に日本の沿岸を防備するための調査が行われたことが挙げられる。

- ① a-c ② a-d ③ b-c ④ b-d

B

未来さんは、夏休みの課題研究で岡山城について調べることにした。先日、博物館を利用した祐樹さんから、オンラインで直接学芸員と話ができることを教えてもらい、早速申し込みをした。次の会話は、その時のやり取りである。

未 来：岡山城ができた年代はいつごろですか。

学芸員：はっきりした年代を特定することはできませんが、宇喜多秀家の時代に本格的な城作りが始まります。小早川秀秋の統治を経て、③池田氏が領主になってからも城はどんどん拡張していきます。それぞれの時代の石垣が残っているのも岡山城の特徴です。

未 来：いまの天守は、どの時代に作られたものが残っているのですか。

学芸員：実は天守は太平洋戦争の時に燃えてしまっていて、いまは昭和40年代に鉄筋コンクリートで再建されたものなのです。歴史に「もし」はないけれど、燃えていなかったら、国宝に指定されているかもしれませんね。ただ、「月見櫓」など、戦災の被害を受けなかったところもあるから、これからも大切に守っていく必要があります。

未 来：戦争だけじゃなく、最近では⑥地震や津波・豪雨災害などで文化財が失われるというニュースもよく聞きます。被災した文化財を守るのも博物館の役割なのでしょうか。

学芸員：はい。災害だけでなく、古い家屋を取り壊す段になって古い民具や古文書が出てくることもあるので、そのために調査に行くこともありますよ。

未 来：それにしても、岡山城天守の外壁って何で黒いのですか。

学芸員：黒塗りの外壁は、天守としては古い形式なんです。実は、本能寺の変直後に焼失した安土城ももともとは黒壁で、もしかしたら安土城を参考にして岡山城は作られたかもしれないんですよ。

未 来：そうなんです。この機会に岡山と織豊政権や江戸幕府との関わりについても調べてみようと思います。ありがとうございました。

問2 下線部㉔「池田氏」に関心をもった未来さんは、次のような年表を作成した。さらに、教科書に載っているある法令（史料）がどの人物が岡山藩主であった時期に出されたものか調べたが、最も適切な時期はどれか。下の①～④のうちから一つ選べ。

岡山藩主 (下段は在職期間)	岡山藩主の主な業績	史料の法令
池田光政 (藩主：1632～1672)	熊沢蕃山を登用して改革を実施。閑谷学校を設けるなど「名君」として知られる。	[あ]
池田綱政 (藩主：1672～1714)	光政の子。津田永忠を用いて大規模な新田開発を推進。後楽園を築いたことでも有名。	[い]
池田継政 (藩主：1714～1752)	綱政の子。全国的に百姓一揆が頻発した時期に治安を維持。絵画の達人でもある。	[う]
池田宗政 (藩主：1752～1764)	継政の子。書画に優れ、聡明な人物として将来を期待されたが、若くして病没する。	[え]
(以下省略)		

史料

御旗本二召置かれ候御家人、御代々段々相増候。御蔵入高^(注1)も先規よりハ多く候得共、御切米御扶持方^(注2)、其外表立候御用筋の渡方二引合候ては、畢竟年々不足の事二候。(中略)それ二付、御代々御沙汰之無き事二候得共、万石以上の面々より八木^(注3)差し上げ候様二仰せ付けらるべしと思召し、左候ハねば御家人の内数百人、御扶持召放さるべきより外は之無く候故、御恥辱を顧みられず仰せ出され候。高壺万石二付八木百石積り差し上げらるべく候。(中略)之に依り、在江戸半年充御免成され候間、緩々休息いたし候様二仰せ出され候。

(出典『御触書寛保集成』)

(注1) 御蔵入高…幕領からの貢租収入
(注2) 御切米御扶持方…旗本・御家人に支給する俸禄米
(注3) 八木…米(米の字を分解したもの)

① [あ]の時期 ② [い]の時期 ③ [う]の時期 ④ [え]の時期

問3 下線部㉕「地震や津波・豪雨災害」に関連する次の出来事Ⅰ～Ⅲについて、古いものから年代順に正しく配列したものを、下の①～⑥のうちから一つ選べ。

- Ⅰ 関東大震災が起こった前年、岡山県南西部を流れる小田川が氾濫して宿場町・矢掛などが甚大な被害を被った。
- Ⅱ 満州国が帝政に移行した年、岡山県では県下全域で室戸台風による大規模な被害が起こった。
- Ⅲ 全国的な米騒動が起こった年、吉井川が氾濫して岡山県北部の美作地方で多数の被害が発生した。

- ① Ⅰ－Ⅱ－Ⅲ ② Ⅰ－Ⅲ－Ⅱ ③ Ⅱ－Ⅰ－Ⅲ
- ④ Ⅱ－Ⅲ－Ⅰ ⑤ Ⅲ－Ⅰ－Ⅱ ⑥ Ⅲ－Ⅱ－Ⅰ

C

博物館で実施している「ジュニア学芸員講座」に参加した理子さんは、学芸員の仕事を体験するとともに、展覧会の企画構成やチラシ作りに取り組んだ。そこでは、いくつかの資料をもとにテーマを決めて展覧会の案を作る課題が出された。その際、理子さんが選んだ資料は次の三つである。

資料A



蒔絵や螺鈿を施した桃山文化の漆器。本品は前面の鍵金具の隅に犬の頭がみられるなど凝った意匠が施されている。

資料B



大槻玄沢が描いた宇田川玄随の似顔絵。津山藩医として医学の勉強をした玄随は、内科の発展に大きく貢献した。

資料C



司馬江漢が絵画を学ぶため長崎へ遊学した時の旅日記。岡山滞在時には吉備津神社の鳴釜神事を記録している。

問4 理子さんが選んだA～Cの資料をすべて展示して展覧会をするとした場合、テーマ名として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

- ①「命を与ふ ー岡山の医療ー」
- ②「鬼ヶ島はどこだ？ ー桃太郎の大冒険ー」
- ③「あだぶとぎにゆうかるちゃあ ー西洋文化と日本ー」
- ④「雅（みやび） ー桃山の名宝ー」

D

悠希さんは、期間限定で国宝「赤韋威鎧」（写真）が展示されていることを知り、休日を利用して博物館を訪れた。その存在感に圧倒された悠希さんは、その時代背景も知りたいと思い、他の資料と合わせて理解しようとした。以下は、関係資料の一部である。

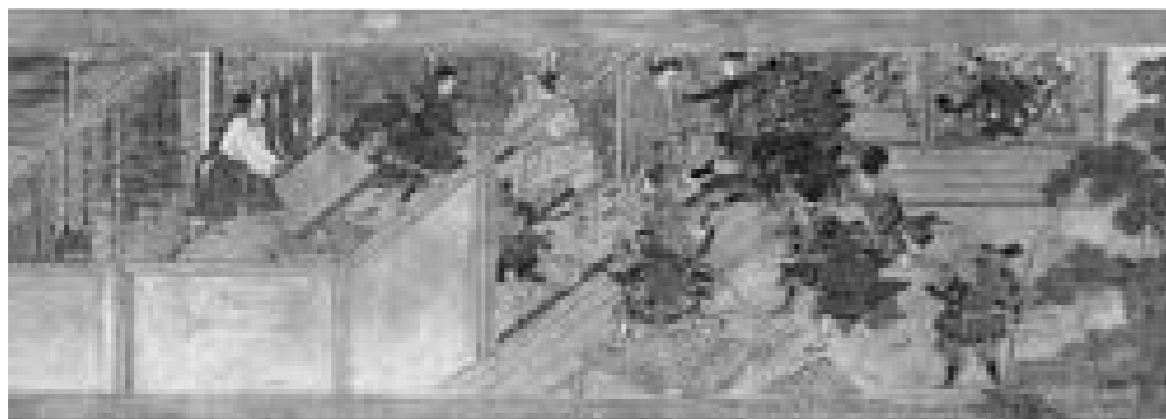
〔キャプションの要旨〕

- ・備中国川上郡穴田郷（高梁市）に伝来した大鎧。武士が実戦で着用したもので、製作当初の形態を留めている。
- ・もとは信濃国（長野県）を本貫地とする東国武士が、穴田郷の新補地頭に任じられ、その際にこの大鎧も持ち込まれたとみられている。
- ・平成11（1999）年に国宝指定。

写真



【資料1】



*『法然上人絵伝』（複製・部分）。左手は、美作国稲岡荘の押領使漆間（漆）時国。対立関係にあった預所明石定明の襲撃を受け落命するが、子の勢至丸（後の法然）に仏門に入ると遺言を残す。

【資料2】



*『水攻防戦之図』（複製・部分）。右上は、羽柴秀吉によって水攻めにされた毛利方の高松城。ただし、近世に描かれた浮世絵であり、誇張して表現しているので注意が必要である。

問5 悠希さんが記録したメモとして最も適切なものはどれか。下の①～④のうちから一つ選べ。

- ① この鎧が作られた時代を描いたものに近いのは【資料1】で、法によらず実力で争うという院政期の社会の特色を表しているように感じた。
- ② この鎧が作られた時代を描いたものに近いのは【資料1】で、鎌倉幕府が畿内・西国への影響力を高め、朝廷の六波羅探題を圧倒しているように感じた。
- ③ この鎧が作られた時代を描いたものに近いのは【資料2】で、法によらず実力で争うという戦国時代の特色を表しているように感じた。
- ④ この鎧が作られた時代を描いたものに近いのは【資料2】で、織田信長が畿内・東海・北陸を支配下におき、中国平定も有利に進めているように感じた。

E

梨花さん、拓也さんの2人が博物館を訪れると、1階の展示室は岡山県の通史コーナーとなっており、冬季展として「流通の歴史」に関するテーマで展示が構成されていた。2人はそれぞれ興味がある資料の一つを選び、写真を撮ってレポートを作成した。以下はそのレポートの一部である。

問6 2人は展示されていた資料X・Yについて、次のようなレポートを記入した。内容とその時代背景となるものをXはa・b、Yはc・dから選ぶ場合、その組合せとして最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

資料X 平城宮跡出土木簡(複製)



◇梨花さんのレポート

私は木の札に墨書した木簡(複製)に注目したい。備前国では贄として海細螺(巻き貝の1種)、調として塩などが献上されていることに関心をもった。教科書では、貢ぎ物の荷札など、様々な場面で木簡が利用されたとあるけど、当時の人々がどのように都まで荷物を運んだのか、もっと具体的に知りたいと思った。

資料Y 水ノ子岩海底遺跡出土備前焼



◇拓也さんのレポート

ぼくは瀬戸内海の海底から見つかった備前焼が展示されていたので驚いた。壺やすり鉢、甕などがたくさん発見された沈没船は備前国から畿内方面へと運ばれる途中だったみたいだ。備前焼というと芸術品のイメージがあったけど、生活に欠かせない道具として広く流通していたことが分かった。

時代背景

- a 律令国家が成立した時期の資料で、古代には成年男子に対して絹・麻布・海産物など郷土の産物を納める税制があった。
- b 律令国家が成立した時期の資料で、古代には所有する土地の広さに応じて官物・臨時雑役などを負担する税制があった。
- c 室町時代前半と思われる資料で、中世には西日本の各地で陶磁器生産が始まり、薩摩焼や高取焼などが作られた。
- d 室町時代前半と思われる資料で、中世には都だけでなく地方の定期市でも様々な物品が取引されていた。

- ① X-a Y-c ② X-a Y-d ③ X-b Y-c ④ X-b Y-d

2 解答と作問の意図

問1の正答は③。取り上げた資料は、日本全国を網羅した携帯用の折本で、いわば旅のガイドブックである。江戸時代の後半になると、このような出版物が多数刊行されていたが、こうした出版文化の隆盛は旅人の増加とも相関関係があるとみてよい。資料の寸法、「木版彩色刷り」などの注記を読めば、bが正しいと判断できる。また、出版年(初版)が「嘉永3年」であることから、ペリー来航前と判断できるためcが正しい。江戸時代の地図としては、化政文化の項で学ぶ伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』が著名であるが、庶民にとっての地図とは物見遊山の旅に携行するようなものが馴染み深かったに違いない。なお、伊能忠敬に関連していえば、伊能に同行して測量した窪田浅五郎の記録(窪田家文書)などがあり、試験問題への活用が期待できる。いずれにせよ、受験生にとっての「初見資料」と教科書の内容が関連付けできるようにすることが大切であろう。

問2の正答は③。岡山藩主池田家の歴史は、従来より当館の常設展示において常に取り上げていたが、日本史との関連付けが弱かった印象がある。池田光政は教科書にも「名君」として掲載されているが、3代将軍徳川家光～4代将軍徳川家綱の代に活躍した藩主である。ついで、岡山藩主となった池田綱政も、後楽園との関係でしばしば展示で取り上げることもあるが、4代将軍徳川家綱～7代将軍徳川家継の代にあたり、まさに元禄文化を謳歌した時代の藩主といえよう。綱政の子池田継政は絵画の技術に秀でており、当館では絵画に関する展示で取り上げることが多い。その治世は、8代将軍徳川吉宗の在職期間とほぼ一致しており、全国的に幕藩体制の動揺がみられるなか、比較的安定した藩政を維持したことで知られる。綱政の子池田宗政は、9代将軍徳川家重と10代将軍徳川家治の初期(田沼時代以前)に該当する。若くして病没したため、その治世の評価は難しいが、近年宗政に関する資料の発見などもあり、その人物像の解明が期待される場所である。上記のことを踏まえて、史料を読むと「高壺万石二付八木百石積り差し上げらるべく候」のところがポイントになる。いわゆる上げ米の令に関することが分かれば「享保の改革」の一環であることが分かるだろう。今回は教科書に掲載されている著名な史料を取り上げたが、「初見資料」の場合は現代語訳したもので難易度を下げ、どの時代の事象かを判断させるのもよいだろう。

問3の正答は⑤。岡山県内の水害に関する年代配列問題である。平成30年の西日本豪雨災害は、比較的安定した気候に慣れていた岡山県下に衝撃を与えた。それ以前から災害から歴史を見る視点はあったが、今後は水害や疫病など現代社会の課題でもあるテーマはより注目する必要があるだろう。無論、Iの関東大震災(1923年)や阪神・淡路大震災(1995年)などは例外として、その他大多数の災害が教科書に載ることはまずない。とはいえ、今回問題で取り上げた事象は、いずれも20世紀前半の岡山県で発生したもので、県下各地に甚大な被害を与えている。とりわけ、IIの室戸台風に関しては当館にも関連資料がいくつかあり、近隣にも被害を伝える痕跡が残っているが、当時の日本がおかれていた状況と関連付けることで、世相をリアル

に感じて欲しい。この年代判定は難解（1934年）だが、「満州国が帝政に移行」とあるので少なくとも満州事変以降の軍部が台頭した時期であると判断できる。Ⅲは米騒動に関する知識があれば、年代はすぐ判定できる（1918年）が、この年からスペイン風邪の大流行が起こっていることも見逃せない。いずれにせよ、単純に年号を覚えるより「大正デモクラシー期」「満州事変以降」といった社会の情勢を理解した上で、災害の歴史を眺めると新たな発見や課題が見つかる可能性がある。

問4の正答は③。資料Aは、草花蒔絵螺鈿櫃。南蛮貿易が栄えた江戸時代初期のものと思われる作品である。西洋人好みの意匠や図柄を、日本の伝統的な蒔絵や螺鈿で施している。西洋風でありながら、日本的な技巧も冴えわたり、東西文化の融合が感じられる。資料Bは、大槻玄沢が描いた宇田川玄随の肖像画である。宇田川玄随は18世紀後半に活躍した人物で、はじめて西洋の内科書を翻訳した『西説内科撰要』を著したことで知られる。江戸に芝蘭堂を開いた大槻玄沢とも交流があり、本資料は両者の深い関わりを窺い知ることができる。資料Cは、司馬江漢の旅日記である。彼は平賀源内に学んで腐蝕銅版画を始めた人物で、主要な洋風画として「不忍池図」などがある。山川出版社の『詳説日本史B』には「蘭学の隆盛につれて油絵の具などとともに絵画の技法が長崎を通して伝えられた」とあり、長崎が西洋文化の発信地であることがわかる。宇田川玄随・司馬江漢は、医学・美術と分野は異なるがともに西洋文化を日本に伝えた同時代の人物である。従って、資料A～Cの共通項としては「西洋文化の受容」というキーワードが抽出される。③は「adopt the new culture」（新しい文化の取り入れ）をくずしたもののだが、展覧会名のセンスとしては評価が分かれるかもしれない。

問5の正答は①。国宝の赤韋威鎧が使用された年代とその時代背景を問うた問題。この大鎧は11世紀末～12世紀頃の製作と考えられており、日本史では平安時代末期の院政期に該当する。キャプションには「穴田郷の新補地頭に任じられ、その際にこの大鎧も持ち込まれた」とあるので、少なくとも承久の乱以前の製作ということが類推できる。従って、【資料1】の『法然上人絵伝』で描かれた武士同士の激しい争いの様子が、同時代の様子を表現しているということになる。指導要領の目標にも、各時代の特色を大きく捉えることに力点がおかれており、こうした絵画など多様な資料から「法によらず実力で争う」という院政期の社会の特色をくみ取ってほしい。なお、選択肢の②は、承久の乱後の説明となっており、かつ京都の六波羅探題を設置したのは鎌倉幕府であるから、記述に誤りがある。ちなみに【資料2】は図版の解説にもある通り、羽柴秀吉による「高松城の水攻め」を誇張して描いた浮世絵である。この高松城攻めの中で本能寺の変が起こって織田信長が死去するので、岡山県史のみならず日本史の転換点としても理解しておきたい。

問6の正答は②。資料Xは、平城宮跡から出土した木簡（複製）である。贄とは、天皇に貢納される食料品で、本資料のように魚類・貝類・海藻類・果実類などの生鮮品が多い。また、調は中央政府の主要財源の1つで、民衆には諸国の産物を都まで運ぶ義務があった。こうした律令国家の負担体系の中心は、成年男子にかかる人頭税であることが大きな特徴である。平安

時代中期になると、国司（受領）は租・庸・調や公出挙の系譜を引く官物、雑徭に由来する臨時雑役を課すようになる。「偽籍」が増えるなど律令体制の行き詰まりが顕著になるなか、課税対象が土地を基礎とするよう変化することと合わせて理解できるようにしたい。資料Yは、水ノ子岩海底遺跡（香川県小豆島沖）出土の備前焼である。室町時代の初期に、備前から畿内方面に向かった船が、小豆島の東6kmの暗礁に乗り上げた際に沈んだ備前焼とみられている。甕・壺・摺鉢など合計200点近くが引き上げられており、相当数の備前焼が国内でも広く流通していたことが分かる。時代は少し遡るが、『一遍上人絵伝』の備前国福岡市でも仮小屋の店舗に備前焼の甕が並べられており、典型的な定期市の様子を垣間見ることができる。cの薩摩焼（島津氏）や高取焼（黒田氏）は、文禄・慶長の役の際に諸大名がつれ帰った朝鮮人陶工らの技術をもとに始まったものである。これらが始まったのは江戸時代初期であるため、水ノ子岩海底遺跡の備前焼が流通した時期と時代が異なる。今回は木簡と焼き物について取り上げたが、当時の社会や外交と文化の広がりが高く関わっていることが理解できるように構成することで、歴史的な事象を有機的に関連付ける訓練にもなるだろう。

以上、共通テストを意識した問題と解答および作問の意図について述べた。無論、実際の共通テストで特定の地域に特化した設定はありえないし、そもそも岡山県史を暗記しないと解けないようでは入試問題としての体を成さない。ただ、本稿では岡山県史を題材にしながらも、高等学校で学習する日本史の知識・理解を駆使すれば解けるように配慮したつもりである。一方で、主に前近代の資料を扱うという当館の性質上、文献史料の少ない古代と専門的に扱っていない近代の問題が手薄となったことは否めない。ただ、古代については考古資料、近代については写真や新聞、民俗資料などを用いた形で問題案を作成する余地もあり、文献史料だけでなくさまざまな分野の資料を用いて歴史を読み解くことができるような工夫を心がけたい。

近年、特定の時代の知識を細かく問うことより、何かしらのテーマに基づき時代を大まかに捉えることを重視する傾向にある。本稿でも、問6は古代～近世の理解を横断的に求める形で作問したが、他の問題についても教科書の複数のページに書かれていることを統合して解答を導くことができるように作成した。また、B・Cは当館で実際に行っているオリジナルの事業をもとに場面を設定したが、実際の入試問題において「高校生が博物館に行って〇〇について調べた」というワンパターンな場面設定に対する不満もある。実際に歴史について調べるのであれば、図書館の方が活用しやすいのが現実である。古文書や絵巻物などの資料を扱うには一定のスキルが必要であり、事前の手続きなども含めると高校生が利用するにはハードルが高い面もある。とはいえ、文化財に関心のある児童・生徒向けに、当館では本稿で紹介した「オンライン質問講座」や「ジュニア学芸員講座」のほか、中学生向けの「職場体験」、大学生向けの「博物館実習」でも学芸員の仕事が体験できるよう、校種に応じたプログラムを設定している。場合によっては、歴史系の学部に進学する生徒への進路相談などにも応じているので、博物館の教育普及事業をぜひ積極的に活用していただきたい。

おわりに

令和3年1月に実施された第1回目の共通テスト（日本史A・B）であるが、入試問題を見た限りでは、従来のセンター試験の形式を踏襲している感が否めないというのが率直な感想である。図版の点数も少なく、かつあまり効果的な活用法とは言いがたい。この点に関していえば、試行調査問題に比べ後退していると感じる部分もあるが、導入初年度でもあり受験生に配慮した結果というべきであろう。とはいえ、指導要領に沿って思考力・判断力・表現力を発揮することが求められる問題は、入試の主流にあるとみて間違いあるまい。実際、センター試験の頃から、授業で扱っている可能性が低い「初見資料」を見て読解する問題はみられたが、よりその方向性は顕著になっていくものと思われる。

また、「はじめに」でも簡単に触れたことであるが、令和3年1月16日に実施された共通テスト「日本史B」の大問1は、「貨幣の歴史」のテーマ発表をすることになった高校生が「事前学習のために博物館に行った」という場面設定となっている。設定そのものの安易さについては先に批判した通りであるが、博物館が生徒・児童にとってさまざまな資料を直接見て学べる場であることは間違いない。従来、当館の教育普及活動の中心は学芸員が一方向的に展示解説する「館内授業」が主流であったが、こうした風潮のもとで新たな役割が求められているようにも感じられる。改修にともなう休館中の事業として、令和2年度・3年度に当館で実施した「オンライン質問講座」は、児童・生徒の質問に学芸員がオンライン上でマンツーマンで答えるというものであったが、こうした双方向的な学びの方法は今後よりニーズが高まる可能性がある。

現在、当館ではリニューアルオープンに備え、岡山県の歴史を物語る通史展示を計画中である。各分野の担当者と協議しながら、適切な資料の選定や魅力的な空間作りを進めているところであるが、時代配分や資料のバランス、順路設定等にも気を配る必要がある。その中で、私個人としては、児童・生徒が岡山県史を通じて日本史を学ぶという教育的要素を重視したい。すなわち、教科書で学んだことを展示資料で確認し、授業を補完する役割である。博物館は教科書や資料集などに掲載されているもの、あるいは関連の深い文化財を実際に見ることのできる場でもある。学校の授業ではなかなか味わえない、古文書の紙の質感や筆の運び、刀の反りなど。私は、この「本物に出会った特別感」が、児童・生徒にとって歴史を身近でリアルなものとして捉え直す契機となることを期待する。加えて、彼らにとって、博物館には多くの「初見資料」が存在する。こうしたものを、単に珍しい展示品として眺めるのではなく、歴史の流れの中でどのような役割を果たしたのか児童・生徒が考察できる工夫として何ができるだろうか。今回作成したような共通テストを意識した問題を設けたコーナーも1つの案として検討中であるが、多様なニーズを把握しながら構成を進めていきたい。